

245. 涼風(すずかぜ)巻

夏の暑い日、1日の終わりの風呂上り、まだ汗が引かないうちに、これを口中に放り込み、よく噛みしめてビールで流し込んだ瞬間「一丁上がり」となった。お題「涼風巻」の名の通り、心地良い涼風が脳内にさわさわと吹き、味覚中枢のみならず、体幹までがその涼しさの恩恵に授かり、しばし恍惚となって、不覚にも「ああ」と声を発してしまった。



撮影当時のイカ（ケンサキイカの下足・エンペラ）には、「茹でる」以外の手当（調味・調理）を施さなかった。それが奏功し「爽やかさ・清々しさ」がハッキリ輪郭として浮き上がる涼しさを誘導する（意図した設計通り）結果となった。しかし、「何か物足りない」の感覚がずっと付き纏っていた。その反面「涼しさを誘導する完成形であることを認めざるを得ない。」の事実を認識し、かなり逡巡した。それでも改善点はあるはずだ。

試作・試食（試行錯誤）を繰り返す中で、「足りない何か」を補完する目的で、細かく刻んだ生の下足エンペラに塩昆布・大葉を混ぜ込み、胡瓜と合わせてみた。これはこれで「足りない何か」の旨味が補完され好かったが、生下足エンペラと柔らかくなった塩昆布の食感が「爽やかさ・清々しさ」を打ち消してしまった。更なる向上を目指して続く。